



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本聖書協会の新しい聖書翻訳事業：『新共同訳』を超えて
Author(s)	阿部，包
Description	日本基督教学会北海道支部2014年度公開シンポジウム「21世紀の聖書研究」．2014年6月7日．北星学園大学，北海道．
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録，4，1-16
Issue Date	2016-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95232
Type	conference paper
File Information	jscsh_004_1.pdf



日本聖書協会の新しい聖書翻訳事業¹ —『新共同訳』を超えて—

阿 部 包

0. はじめに一約 30 年周期の新しい聖書翻訳

わが国における聖書翻訳の歴史は、キリスト教が伝来した 16 世紀に始まる²。近代に入ると、ギュツラフ K. Gützlaff³、ベッテルハイム Bernard J. Bettelheim⁴による訳業が登場するが、聖書の日本語訳史上名高いのは、うしろへボン J. C. Hepburn によるもの⁵であろう。

しかし、旧新約聖書翻訳という点で画期をなすのは、明治元訳聖書⁶である。次いで、この改訳版である大正改訳聖書⁷が出版されたが、これは新約聖書のみであった。現在でも、特にプロテスタント

¹ シンポジウム当日（2014 年 6 月 7 日）は、「新翻訳プロジェクト」という用語を用いたが、その後、「新翻訳事業」という用語が定着したので、本稿では後者を用いることとする。なお、この新翻訳事業については、日本聖書協会のホームページ情報、参照。http://www.bible.or.jp/know/know31.html

² J. Fernandes, S.J.による四福音書、Luis Frois, S.J.による福音書の一部、イエズス会による新約聖書全巻。しかし、これら通称「キリシタン版日本語訳新約聖書」は現存しない。

³ 「約翰福音之伝」1837 年。

⁴ 「約翰伝福音書」、「路加伝福音書」、「聖差言行伝」、「保羅寄羅馬人書」1847～51 年、1858 年、1873 年。

⁵ 「新約聖書馬可伝」、「新約聖書訳翰伝」、「新約聖書馬太伝」1872 年。岡野昌綱が翻訳協力者。通常、ヘボンと表記され、ヘボン式ローマ字で有名であるが、スペルで分かるとおり、著名な女優の苗字と同じである（ヘップバーン）。

⁶ 新約聖書は翻訳委員社中による。旧約聖書は東京聖書翻訳委員会による。1874～1887 年。底本は欽定訳である。

⁷ 改訳委員会による。1910～1917 年。旧約聖書は 1942 年以降改訳が進められたが、戦後口語訳への方針転換によって完成を見なかった。

の信者の間で根強い支持がある日本聖書協会⁸の文語訳聖書は、明治元訳聖書の旧約の部と大正改訳聖書を合本化したものである。

1950年代になると、現代仮名遣い、当用漢字の制定等、日本語自体の変化や聖書学の進展を受けて、口語による聖書翻訳の作業が始まった。その成果がいわゆる口語訳⁹である。

キリスト教の歴史を瞥見すると、分裂の歴史と言っても過言ではない。東方教会と西方教会、西方教会とプロテスタント教会、英国国教会、欧米における多くの教派の発生などを、キリスト教は経験してきた。そのような長い抗争と分裂の歴史を背景に、20世紀になって、特にカトリックとプロテスタントの間でエキュメニズムという一致を目指す運動が始まった。この運動の具体的成果は第二ヴァチカン公会議¹⁰を契機に生み出された。カトリックとプロテスタント両陣営は、聖書の中に互いの一致¹¹と全人類の一致の基盤を見出し、共同訳への取り組みが始まったのである。

わが国においても、「共同訳聖書実行委員会」が1970年に組織され、両陣営の100名を超える聖書学者の参加を得て、新しい聖書翻訳作業が開始された。作業の途中で翻訳方針の劇的な転換¹²もあり、

⁸ 聖書翻訳事業を引き継いで、1937年設立された。

⁹ 新約聖書は1954年、旧約聖書は1955年に完成した。協会訳とも呼ばれる。

¹⁰ 1962年から1965年にかけて開催された。それまでラテン語でさげられていたミサが、この会議を機に各地の言語で捧げられるようになった点で画期的であると同時に、一般信徒が自分で聖書を読むことができるようになったという点でも画期的であった。

¹¹ 聖書協会世界連盟(UBS=United Bible Societies)とローマ・カトリックの教皇庁キリスト教一致推進事務局とが連名で「聖書翻訳におけるプロテスタントとカトリックの共同作業のための標準原則」(通称「標準原則」)を公表した。1968年。

¹² 一般読者対象から教会における使用へと方針が転換された。当初指針とされたのは、Today's English Version (TEV) = Good News Bible (GNB) や Common English Bible (CEB) の理論的支えとなつた動的等価翻訳理論 Dynamic and formal equivalence であり、その提唱者として知られるナイダ E. Nida も招かれて講演をした。しかし、これに依拠して訳されたパイロット版聖書である「共

多くの紆余曲折を経て完成まで 18 年という長い時を要したが、1987 年に『聖書 新共同訳』が発行された。今日、日本社会で最もよく用いられているのはし、この新共同訳であろう。

以上のように、わが国における聖書翻訳の歴史を簡単にたどってみて分かることは、明治元訳聖書（1887 年）、大正改訳聖書（1917 年）、口語訳聖書（1955 年）、新共同訳聖書（1987 年）と、新しい聖書翻訳には約 30 年という周期があるということである。1987 年の新共同訳聖書発行から 30 年の節目は、奇しくも、宗教改革 500 年という記念すべき年である。新共同訳の発行元である日本聖書協会が新たに立ち上げた新翻訳プロジェクトは、当初の発行目標を 2016 年に設定していた。すなわち、新しい翻訳聖書を手に宗教改革 500 年を迎えようという計画だったわけである。敢えて過去形で記したのは、残念ながら、2015 年末現在、発行予定が 2018 年に繰り下げられているからである。

1. 新翻訳聖書事業に係る準備作業

ここで、今回の日本聖書協会による新翻訳事業を準備の段階から、実際にプロジェクトが開始されるまで、簡単に箇条書き形式で振り返っておく。

2003 年 09 月	職員研修開始、UBS ¹³ 翻訳ソフト研修会
2004 年 01 月	インドネシア聖書翻訳プロジェクト、訪問
2005 年 02 月	韓国トランスレーション・ワークショップ

同訳聖書」の評判は頗る悪く、委員会はこの翻訳理論を指針から外し、教会における礼拝・典礼における使用という方向へと舵を切り直したのである。

¹³ United Bible Societies（聖書協会世界連盟）の頭文字による略称。2013 年末現在、146 の聖書協会が加盟している。次の情報、参照。

<http://www.bible.or.jp/soc/soc09.html>

	プ、参加
2005 年 11 月 01 日	日本聖書協会翻訳部、設立
2006 年 05 月 03～04	国際聖書フォーラム 2006 ¹⁴ 、開催
2006 年 11 月	欧州翻訳プロジェクト研修、参加。翻訳事業の準備、開始
2007 年 06 月 27～28	国際聖書フォーラム 2007 ¹⁵ 、開催
2008 年～	理事評議員翻訳懇談会、開催（3 回）
2008 年 03 月 13～13	聖書翻訳ワークショップ（ウィクリフ聖書翻訳協会との共催） ¹⁶ 、開催。ローレンス・デ・フリスによる講演
2008 年～2009 年	各教派に新聖書翻訳への協力と諮問会議委員派遣を要請。諮問会議、開催（4 回）
2009 年 10 月	「翻訳方針前文」 ¹⁷ 採択（第 4 回諮問会

¹⁴ 講師陣は国内外の研究者など 23 人。ローレンス・デ・フリス Lourens De Vries（翻訳理論、アムステルダム自由大学教授・聖書協会世界連盟翻訳指導員）、クラウス・ヴァハテル Klaus Wachtel（新約本文校訂、新約聖書本文研究所主任研究員）、アドリアン・シェンカー Adrian Schenker（旧約本文校訂、ヘブライ語旧約聖書第 5 版 Biblia Hebraica Quinta 刊行チーム総責任者）、エマニュエル・トーブ Emanuel Tov（死海文書、死海文書刊行国際チーム総責任者）、J. M. ロビンソン J. M. Robinson（新約聖書）、J. ドミニック・クロッサン J. Dominic Crossan（新約聖書）など著名な研究者が名を連ねた。

¹⁵ 講師陣はリチャード・ボウカム Richard Bauckham（新約聖書）、フランソワ・ボヴァン Francois Bovin（宗教史）、キャロル・L・マイヤーズ Caroll L. Meyers（聖書世界の女性）、マーヴィン・マイヤー Marvin Meyer（初期キリスト教）、ウィリアム・L・ホラデイ William L. Holladay（宗教史）などである。

¹⁶ 講師はローレンス・デ・フリス Lourens De Vries（翻訳理論）である。日本聖書協会のホームページ情報「特集 聖書の翻訳とは—『聖書翻訳ワークショップ』をすりかえて」、参照。
http://www.bible.or.jp/transl_website/doc/new_project/sower_32.pdf

¹⁷ 「翻訳方針前文」は、注 1 に上げた日本聖書協会のサイト「新翻訳事業について」からアクセスすることができる。

議)

- 2009 年 12 月 04 日 日本聖書協会理事会において、新翻訳事業の開始が承認される。新翻訳事業開始決定の記者発表。各教派に対して新翻訳事業における翻訳者等の推薦を依頼
- 2010 年春～夏 翻訳者の人選
- 2010 年 08 月 第 1 回翻訳者オリエンテーション、開催
- 2010 年 09 月 第 1 回新翻訳事業検討委員会、開催
- ※なお、2006 年、2007 年からかなりの間において、国際聖書フォーラムが開催されている。
- 2012 年 07 月 05～06 国際聖書フォーラム 2012¹⁸、開催

2. 新翻訳事業の方向性

2009 年 10 月に開催された第 4 回諮問会議において採択された「翻訳方針前文」によれば、新しい聖書翻訳の主要な目的は「礼拝で用いること」であり、今回の新翻訳事業が目指しているのは「日本の教会の標準訳聖書となること」である。また、翻訳に当たって、可能な限り最新の校訂本¹⁹を底本として用い、聖書学・翻訳学等の

¹⁸ 講師陣は W・H・シュミット Werner H. Schmidt (旧約聖書)、レスター・L・グレイビー Lester L. Grabbe (ユダヤ教)、ペトラ・フォン・ゲミュンデン Petra Von Gemünden (新約聖書)、田川建三 (新約聖書) などである。

¹⁹ 底本はそれぞれ、旧約聖書が *Biblia Hebraica Quinta* (BHQ)、新約聖書が United Bible Societies (UBS) 第 4 版、旧約聖書続編がいわゆるゲッティンゲン版 *SEPTUAGINTA Vetus Testamentum Graecum Auctoritate Academiae Scientiarum Gottingensis editum* である。ただし、新約聖書については新翻訳事業が開始された後で、ネストレ・アーランド 28 版 Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Edited by Barbara and Kurt Aland, Johannes Karavidopoulos, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger, 28th Revised Edition, 2012, Deutsche Bibelgesellschaft が出版されたことを受けて、UBS も改定第 5 版を発行したので、適宜それらが参照されることになった。

成果を踏まえて原典に忠実な翻訳を心がける。さらに、固有名詞や重要な神学用語については、広く諸訳を参考にして最も適切な訳語を見出す努力をすることとしている。なお、今回の新翻訳事業において導入されるものとして、異読、直訳、別訳など本文訳を読む上で重要かつ便利な参照情報に関する注記がある。

翻訳方針の大きな転換という新共同訳における経験を活かして、今回の新翻訳事業ではその準備段階において二度にわたりローレンス・デ・フリス氏を招き、最新の翻訳理論であるスコポス理論²⁰について学ぶ機会を持った。この翻訳理論に従えば、その翻訳がそもそも誰のために（聴衆・読者）、また何のために用いられるか（使用目的・機能）によって、翻訳方針も自ずと異なるのである。日本聖書協会は、「デ・フリス氏の講演によって、今後の聖書翻訳事業の基盤となる重要な枠組みが提供された」²¹と評価している。

われわれ今回の新翻訳事業に参加している翻訳者に配布されている「新翻訳事業 翻訳実務のためのガイドライン」にも、「本事業の特徴」としてスコポス理論が謳われ、「本翻訳事業のスコポスは礼拝での使用です」と明記されている。

また、新共同訳聖書と異なる今回の新翻訳事業の大きな特徴の一つとして上げられるのは、「原語の意味の範囲を示す」原語担当者と「訳文を日本語としてより自然で美しいものにする」日本語担当者が、翻訳作業の初期段階からチームとして関わるという点がある。

²⁰ ギリシア語 σκοπός に由来する。「標的、目標、目的」を意味する。翻訳に際しては何よりも目標・目的が重視されるべきであり、目標・目的こそが翻訳の方法を決定づけ、そうして初めて適切な翻訳がなされ得る、とする。「スコポス理論」はもともと、1984年にハンス・フェアメーア Hans Vermeer が提唱したものである。アンソニー・ピム／武田珂代子訳『翻訳理論の探求』、みすず書房、2010年、参照。

²¹ 日本聖書協会『ソア Sower』No.35、2010、5頁、参照。

http://www.bible.or.jp/contents/soc/pdf/sower_no35.pdf 注1に上げたサイト情報からのアクセス可能である。

ここにも新共同訳における経験が活かされていると言ってよい。

3. 翻訳者

次に、新翻訳事業に携わっている翻訳者の氏名一覧を示す²²。

・原語担当

旧約：雨宮慧、飯謙、池田潤、石川立、浦野洋司、大串肇、大島力、大住雄一、岡崎才蔵、小友聡、楠原博行、小林進、小林祥人、佐久間謹、左近豊、谷川正美、樋口進、柊暁生（旧約統編兼任）、本間敏雄、山森みか、山吉智久

旧約統編：岩本潤一²³、菅原祐治、高橋英海、田内千里、戸田聡、中村秀樹、山下敦

新約：浅野淳博、阿部包（旧約統編兼任）、江川憲²⁴（旧約統編兼任）、川中仁、須藤伊知郎、住谷眞、武田なほみ、辻学、津村春英、中野実、廣石望、布川悦子、三浦望、嶺重淑、吉田新

・日本語担当

石黒圭、石原真、岡野絵里子、春日いずみ、木鎌謙一郎、酒井一郎、佐藤裕子、柴崎聰、饒平名尚子、杉内峰彦、高梨信乃、高橋由美子、長濱拓磨、西脇純、芳賀繁浩、畠山寛、原岡文子、廣瀬正宜、前川斎子、松永美穂

翻訳者の中には、江川憲氏のように翻訳作業半ばで病に倒れた方もおられるし、校務の多忙さ等を理由に途中で辞退する者も出て、

²² ここに掲げる翻訳者一覧は、2012年04月01日現在のものに、2014年夏の時点で新たに加わった担当者名を追加のものである。2012年以降約4年が経過して、作業半ばで帰天した者、途中で退いた者、追加委嘱されて加わった者等、異動があった。

²³ 翻訳作業の途中で、カトリック中央協議会から日本聖書協会翻訳部に転職したため、現在は翻訳者から外れている。

²⁴ 2012年06月05日、帰天（神言会司祭、南山大学教授在職中）。

日本聖書協会翻訳部は追加委嘱に向けた情報収集に追われることもしばしばであった。上掲一覧を見て分かるとおり、日本語担当が原語担当に比べて顕著に少なく、日本語担当者はかなりの数の文書を担当せざるを得ない状況が続いているのも事実である。

4. 翻訳作業の具体的プロセス

今回の新翻訳事業において実際に進められている翻訳作業の具体的なプロセスについては、2 頁後に掲げる図²⁵を参照願いたい。

各翻訳担当者の翻訳作業は、原則として UBS の技術者が開発した翻訳作業用ソフト **Paratext** を使って行なわれる。現在われわれが使っているのは、**Paratext Version7.5**²⁶である。原語担当者も日本語担当者も、このソフトを立ち上げてコンピュータ上でそれぞれの翻訳作業を進めたり、相互に意見を出し合いながら共同で翻訳作業を進めてきた。**Paratext** について、簡単な説明をしておこう。このソフトは聖書翻訳者の翻訳作業に特化したものである。旧約聖書、旧約聖書続編、新約聖書の各原典の他に、それらの各言語訳、さらに翻訳上の問題点やそれらの解説が記された **UBS ハンドブック**などを参照することができる。各翻訳担当者は、それら膨大な情報源の中から自分に必要な情報を選択し、それらを画面上に適宜レイア

²⁵ 日本聖書協会『ソア Sower』No.41、2014、6 頁。

http://www.bible.or.jp/transl_website/doc/new_project/sower_41.pdf

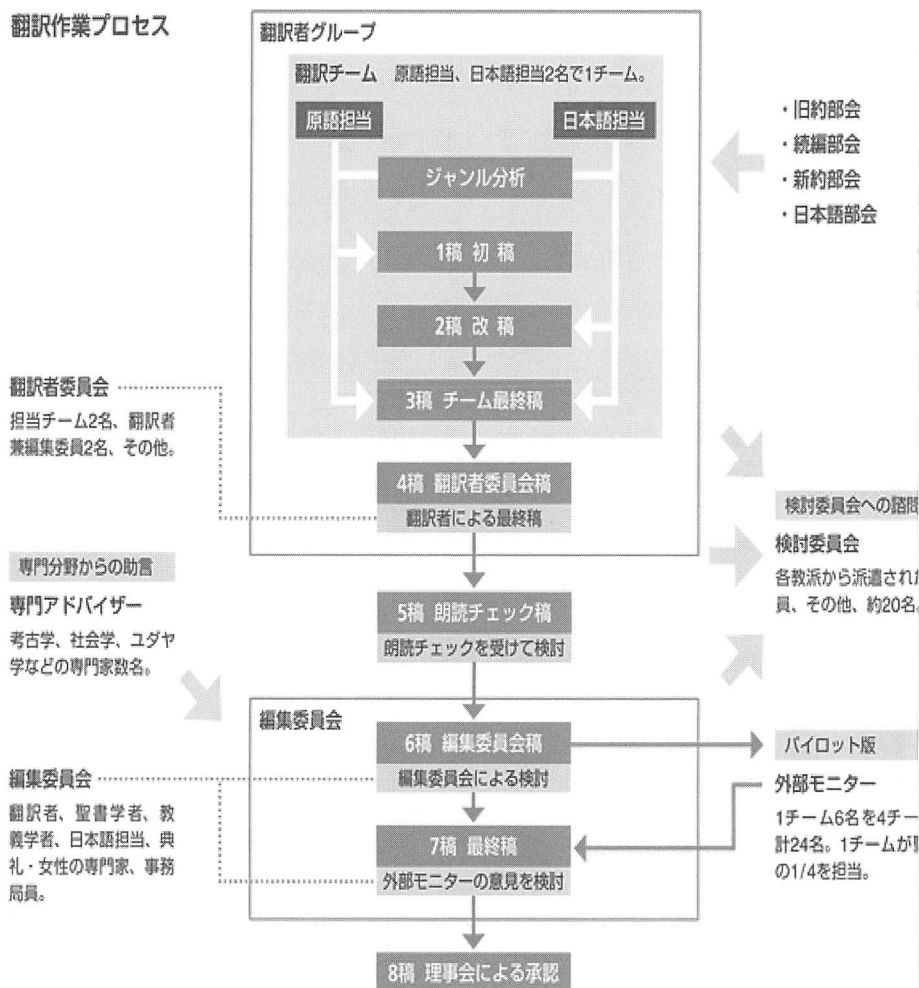
²⁶ **Version7.3** 以降、従来の機能に加えて、**Skype** と連動させることにより、原語担当者の場合を例にすると、石狩市にある自宅の書斎のコンピュータと東京の日本語担当者の自宅のコンピュータとの間でシンクロさせて、翻訳の改定作業をクラウドコンピューティングで進めることが可能になった。わたしと日本語担当者はこの作業を、一定期間、毎週金曜夜 9 時~10 時半に行なった。後に、翻訳者委員会による検討に際しても、わたし自身の個人的な事情で上京できないときには、自宅の PC と銀座にある日本聖書協会翻訳部の会議室のホスト・コンピュータとの間でシンクロさせて、作業を進めることができた。新共同訳の際の翻訳作業と比べて、今回の新翻訳事業の最大の特徴は **Paratext** 上で翻訳作業を進めているという事実であろう。翻訳作業は飛躍的に効率化されたと言ってよい。

ウトして使っている。例えば、新約の原語担当者であれば、UBS 第 4 版²⁷、LXX、先に上げたハンドブック、文語訳、口語訳、新共同訳、新改訳、英語訳、ドイツ語訳、フランス語訳などを常に参照できるように選択しておくのが便利である。ただし、実際には、画面のサイズの制約を受けるので、わたしの場合は、LXX、口語訳、NRSV 以外の英語訳、ドイツ語訳、フランス語訳、フランシスコ会聖書研究所訳、田川建三訳、岩波訳、塚本訳などを常に身近に置いて作業を進めてきた²⁸。なお、Paratext では原文の任意の単語にカーソルを合わせると、欄外にその単語の文法上の説明が略語で、また中心的な語意が表示されるようになっている。なお、各翻訳担当者は、翻訳作業の開始時および終了時に Send/Receive ボタンをクリックして、常に最新の翻訳作業結果を保存することになっている。

²⁷ 現在は、2012 年の Nestle-Aland 第 28 版発行に伴って、UBS も第 5 版となっている。

²⁸ この他、岩隈直『増補改訂 新約ギリシヤ語辞典』、Liddell & Scott, Jones and McKenzie, *Greek-English Lexicon*、『ギリシア語 新約聖書釈義辞典』、Konputer Konkordanz zum Novum Testamentum Graece、また、訳語の絞り込みに際してしばしば参照したのは、大野晋、浜西正人『角川 類語新辞典』である。

翻訳作業プロセス



翻訳作業のプロセスは、概略次のとおりである（上図「翻訳作業プロセス」参照）が、今回の新翻訳事業の大きな特徴は、原語担当者と日本語担当者が最初からペアで作業を進めるという点にある。原語担当者と当該地域の言語担当者とは最初からペアで作業を進め

るという新しい方法は、2004年に刊行されて成功したオランダ語訳聖書の方法に倣ったものである。新共同訳を含め従来の聖書翻訳において、日本語の専門家によるチェックは最終段階で初めて導入されるものであった。

ジャンル分析→1稿 初稿（原語担当）→2稿 改稿（日本語担当）→3稿 チーム最終稿²⁹（原語担当・日本語担当）→4稿 翻訳者委員会³⁰稿（翻訳者委員会）→朗読チェック³¹→5稿 翻訳者委員会最終稿（朗読チェックによる意見を考慮して検討）→6稿 編集委員会³²稿（編集委員の意見を考慮して検討）→外部モニター³³による意見→7稿 編集委員会最終稿（外部モニターの意見を考慮した編集委員会による調整）→8稿 最終稿 理事会による承認→印刷・発行

このプロセスのうち、特に1稿～4稿作成作業に対して、適宜、旧約聖書部会、旧約聖書統編部会、新約聖書部会、日本語部会による課題検討のための会議が開催され、その検討結果が翻訳作業にフ

²⁹ この3稿までが翻訳チーム（原語担当・日本語担当各1名）による作業である。

³⁰ 担当翻訳チーム（原語担当・日本語担当各1名）、翻訳者兼編集委員2名、その他。これは、聖書の一言一句を4人以上の目で確認し検討する場であり、誤訳を避けると同時により良い日本語表現にするための極めて重要な役割を担っている。

³¹ 「翻訳方針前文」にある「礼拝で朗読することを主要な目的とする」および「義務教育を終了した日本語能力を持つ人を対象とする」という方針を満たすべく、ごく普通の日本語能力を備えていると見なされる人に依頼して、朗読する文章として自然かどうか、朗読を聴いたときに自然に理解できるかどうかをチェックしてもらう。ただし、敢えて率直に言わせてもらえれば、読み手・聴き手としてのコメントを読む限り、現代日本人の平均的な日本語能力はやはりかなり低下していると言わざるを得ない。

³² 翻訳者による原稿を新たな視点から検討する場であり、翻訳者、聖書学者、教義学者、日本語担当、典礼の専門家、女性の専門家、事務局員から構成されている。新翻訳事業の最終決定機関とも言うべき組織である。

³³ 1チーム6名として4チーム（計24名）。各チームが聖書全体の1/4を担当する。

ードバックされてきた³⁴。

なお、翻訳者（原語担当、日本語担当）は、大学教員にせよ牧師・司祭にせよ、かなりの割合の者が現役であるため、チームによる作業や翻訳者委員会による検討作業の日程調整は思いのほか手間取ることになる。勢い、翻訳作業や検討作業が予定より遅延する結果となり、ここ数年間、われわれ翻訳担当者は、日本聖書協会翻訳部が準備した春の合宿と夏の合宿³⁵に参加して集中的に作業を進めている。

翻訳作業プロセスも、当然ながら、実際には固定的ではない。先に示した「翻訳作業プロセス」図は、第一次改定後のものであり、当初、朗読チェックは3稿と4稿の間に行なわれていたが、作業プロセスとして決して生産的ではないとの意見³⁶が翻訳者委員から少

34 例えば、新約聖書部会では、かなり早い段階に ἐν Χριστῷ, πίστις Ἰησοῦ Χριστοῦ など重要な句の訳語の検討がなされた。しかし、前者の ἐν については「に結ばれて」（新共同訳）ではなく「において、にあって」の方向で訳すという合意がなされたが、後者の πίστις については、方向性は確認されたものの、いまだに訳語の確定には至っていない。確認されたのは、新共同訳をはじめとする従来訳のように体格的用法としては訳さないという方向性である。わたしは神の場合以外は、一貫して「信仰」と訳しうろと考えているが、新約学者の大多数は、「信実」を推している。

35 会場は主として、カトリックの修道会が運営する「黙想の家」である。栃木県那須（ベタニア修道女会聖ヨゼフ山の家）、神奈川県鎌倉（イエズス会日本殉教者修道院黙想の家）、静岡県裾野（聖心会裾野マリア修道院黙想の家）などで行なってきた。

36 意見を言った委員の中にわたしも入っている。朗読チェック担当者は、翻訳者チームによる翻訳案について読み手の立場、聴き手の立場からの率直な意見を示してくれるのであるが、それらを章・節ごとに記入したエクセル・ファイルを読んで、愕然とすることがしばしばであった。「ぎにん」と聞いて普通の日本人は「義認」を思い浮かべることはない、「偽認」かと疑った、とある担当者は記していた。わたしはむしろその担当者の日本語感覚あるいは日本語の常識を疑わざるを得なかったのである。ちなみに、ばかばかしいけれども、広辞苑に当たってみた。「ぎにん」と読む熟語は、少なくとも広辞苑では「義認」だけである。「偽認」なる熟語は日本語表記にはないのである。発音を聞いて、該当する熟語を思い浮かべずに、そのように発音可能な漢字を当てはめて平然とし

なからず上がったため、検討の結果現在の位置に移動することになったものである。

現在の進捗状況³⁷について簡単に記しておく、翻訳者委員会による原稿完成率は2015年で60%を超え、2016年には100%に達するという予測がなされている。これまで編集委員会が検討した書は、ハバクク、ゼファニヤ、ナホム、オバデヤ、ヨエル、エゼキエル（以上、2014年11月）、エフェソ、ローマ（以上、2015年2月）、コヘレト、哀歌、エゼキエル（以上、2015年6月）、ガラテヤ、フィリピ、一テモテ、二テモテ、一ペトロ（以上、2015年7月）、レビ記、ルツ記、列王記下1-17（以上、2015年10月）、詩編73-106編、エゼキエル27-41章（以上、2015年10月）である。こうした進捗状況を受けて、2015年12月から、一般読者の声を聴くために、新翻訳聖書パイロット版の販売が開始された。

5. 原語担当者と「翻訳実務のためのガイドライン」

ここで、原語担当者としての経験を踏まえて、1稿作成の実際を簡単に紹介しよう。われわれ翻訳担当者は、実際の翻訳作業に進める上で準拠すべきガイドラインを配布された。それが「翻訳実務のためのガイドライン」であり、その第2章が「第一稿（原語担当者）のためのガイド」である。新約を例にして若干の説明をしたい。

ている現代日本人の寒々しい姿を思い浮かべてしまうのはわたしだけではあるまい。ちなみに、義務教育終了程度の日本語能力を身に着けずに、義務教育課程を終えて、高等学校の教育課程をも潜り抜け、その能力のままで大学に入学してしまう例が増えている事実を、長年大学教育に携わっている者は実感しているのである。

³⁷ ここに記す情報は、わたしも講師を務めたシンポジウムが開催された時点ではなく、2016年2月現在のものである。なお、2016年3月15日現在、購入可能なパイロット版は次の書である。レビ記、ルツ記、哀歌、ナホム、ハバクク、ゼファニヤ、エフェソ、フィリピ、テサロニケー、テサロニケ二、ヤコブ、ヨハネの黙示録。いずれも100円、200円という廉価である。『2015年度 日本聖書協会年報』（Vol.116、2016年2月）、8～9頁。

わたしが原語担当を引き受けた 2011 年の時点で、底本は UBS 改定第 4 版であった。参考書については、ある程度共通したもの³⁸を用いたいとしている。また、過去の邦訳聖書を参照するよう指示されている。中でも必ず参照すべきものとして挙げられているのは、口語訳、フランシスコ会聖書研究所訳、岩波版である。

原語担当者は、1 稿作成の段階から自然な日本語を目指すよう求められており、その際、口語訳、新共同訳の日本語表現を参照しつつ、新共同訳の訳文を基に、それを原語から見直し、実質的には改定に近い作業をしていく、としている。しかし、付帯的説明として「ただし、正式な改定ではないので、改定のような制限がなく、自由な変更ができます。『自由な改定』と言えるかもしれません」とあるために、原語担当者の翻訳に当たってのスタンスは、これらの説明の受け止め方次第で異ならざるを得なくなる。容易に推測されるように、原語担当者が原文を読む過程で、どうしても口語訳や新共同訳とは異なった訳文にせざるを得ない個所が皆無とは言えない。ましてやパウロの手紙の場合、必ず参照すべき翻訳とされている岩波版は決して読みやすい翻訳とは言えないし、解釈に首を傾げたくなる個所もないとは言えない。結果的に、私訳を仕上げた後で、新共同訳、口語訳、岩波版、フランシスコ会聖書研究所訳の訳文と比較して、新共同訳と同等のレベルの読みやすさに達するまで私訳に改定を施すという手順をとった。経験的に言えば、おそらく、こうした作業過程が比較的自然的ではなかろうか。

ところで、今回の新翻訳事業が採用した新しい方針で、原語担当者として最も歓迎すべきなのは本文注である。本文の翻訳に際して、

³⁸ 辞書は Bauer 第 3 版、Liddell-Scott 等、注解書は Anchor Bible, Word Biblical Commentary, Hermeneia, ICC, Black, IGTC, EKK 等、文法書は Blass-Debrunner-Funk, Danna-Mantey, Brooks-Winberry, Daniel Wallace 等、本文批評は B. Metzger, A Textual Commentary on the Greek New Testament, 2nd.ed. が掲載されている。

底本の読みから離れて異本に従う場合、読みは底本どおりだが幾つか重要な訳が可能な場合、原語の意味の説明があるとよいと考えられる場合、あるいは、原語の表現の慣習と日本語のそれとの違いによって意識もしくは若干説明的な訳が必要と考えられる場合などに、可能な限り簡潔にそれらを本文注に記すことができるようになった³⁹のである。本文注の数や内容は NRSV を目安にするが、NRSV ほど詳細な解説も議論も、また多くの写本の支持もしないという枠組みは与えられているものの、特に新共同訳の訳語から離れざるを得ない場合など、本文注のお陰で、読者に「これは誤訳ではないか」という不要な疑いを抱かせずに済むという利点がある。

6. おわりに―『新共同訳』を超えて

最後に、原語担当者として関わっている経験から、今回の新翻訳事業が『新共同訳』聖書を超える可能性について、具体例を一つ挙げて説明しよう。それは、ローマ 3 章 22 節、ガラテヤ 2 章 16 節、3 章 22 節に出る πίστις Ἰησοῦ Χριστοῦ という句の訳語についてである。これはパウロ理解にとって極めて重要なキーワードの一つであり、研究者の間でもその解釈をめぐって議論が続いている句である。新共同訳では、前者が「イエス・キリストを信じること」、後者が「イエス・キリストへの信仰」と訳されており、Ἰησοῦ Χριστοῦ という属格を目的格的用法と解した訳語である。従来はこのように解するのが通例であつた。しかし、今日では、当該の属格を主格的用法と解する研究者がかなりの割合に上ることは周知のとおりである。この間の解釈の推移を反映しているのが、いわゆる欽定訳と呼ばれた KJV 系列の訳語である。KJV は Faith of Jesus Christ、NKJV は Faith in Jesus Christ、そして最新の KJV21 は KJV と同じ Faith of Jesus Christ に戻ったのである。わたしは、個人的には「イエス・キ

³⁹ 柊暁生「新しい翻訳聖書の特徴―本文注―」日本聖書協会『ソア Sower』No.43、2016、8～9 頁。

リストの信仰」という訳語を提案している。ただし、新翻訳事業は、現時点で「イエス・キリストの信実」という訳語を採用する可能性が高い。その場合、極めて大きな困難をわれわれ翻訳担当者、翻訳者委員会、編集委員会が抱え込むことになるのは明らかである。なぜなら、パウロの同じ手紙の中に、πίστιςの訳語として「信実」と「信仰」が必然的に混在し、しかも、イエス・キリストのπίστιςとパウロがそれを論証するためのモデルとして提示したアブラハムのπίστιςとに「信実」と「信仰」という相異なる訳語を用いざるを得なくなるからである。

パウロにとって、イエス・キリストの信仰は正に十字架において愛をとおして現実化したのであり、同様にわれわれにとっても信仰は愛をとおしてのみ現実化しうるものなのであるということ⁴⁰を、最後に指摘して稿を閉じたい。

⁴⁰ ガラテヤ5章6節に出る句 πίστις δι' ἀγάπης ἐνεργουμένη というもう一つのキーワードを参照。